

Title	シュラムの比較生産費説
Author(s)	松井, 清
Citation	経済論叢 (1937), 44(6): 1336-1343
Issue Date	1937-06-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/130959">http://dx.doi.org/10.14989/130959</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 六 號 第 四 十 四 卷

昭和二十二年六月一日發行

## 論 叢

現實利子の問題……………文學博士 高田保馬  
現下の土地問題と農地法案……………經濟學博士 八木芳之助

## 時 論

輸入統制に伴ふ『割當利得』の問題……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

德川時代の夫役に就いて……………經濟學士 堀江保藏  
經濟社會學序說……………經濟學士 北野熊喜男  
ルーテル經濟觀の特質……………經濟學士 澤崎堅造  
大都市交通の特性……………商學士 小泉貞三

## 說 苑

ロオゼンシュタイン・ロダン「一般的  
貨幣論と一般的價格論との同格化」……………經濟學士 飯田藤次  
資本組織の有機的變化と平均利潤率……………（マスター、オブ、アーツ  
（ウィスコンシン大學）……………都留重人

都留學士に答ふ……………經濟學士 柴田敬

シユラムの比較生産費說……………經濟學士 松井清  
キヤレル氏保護關稅と就業……………經濟學士 岡倉伯士

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題  
本誌第四十四卷總目錄

## シュラムの比較生産費説

松 井 清

### 一

一九三〇年を大體の轉期として貿易理論は注目すべき數歩を前進したようである。從來の勞作が多かれ少かれ古典學派の繼承であつたのに對して、その頃以後に現はれた論文は、一方では勞働價值説を排除した點に於て、他方では貨幣側からの作用力を考慮に入れ初めた點に於て、古典學派の開拓し得なかつた新しい幾多の領域を開拓してゐる。オーリンやハーバラーの書物に親しみを持つひとであるならばこのことをよく了解するはずである。こゝに紹介しようとするウォルター・シュラム <sup>1)</sup>Walter Schramm の論文もこの方面に於ける一つの試みとして吾々の興味をそゝるものがある。比較生産費説の使命は國際貿易が如何なる利益をもたらすかと云ふことを論證する計算技術 Kalkulations-

1) Walter Schramm: Kritisches Bemerkungen zur Theorie der komparativen Kosten (Weltwirtschaftliches Archiv 44. Band Sept. 1936 Heft 2)

technik を提供する點に存する。リカード以來比較生産費説の例證に二國二財が想定されたのは、かゝる計算技術を容易ならしむるためであつたと云ふことが出来る。更らにリカードは兩國の生産費を統一的に把握する手段として勞働價值説を用ひてゐるが、勞働價值説はさう云つた計算にとつて必ずしも必要ではない。

むしろ理論は單一の價值尺度として貨幣費用を用ひた場合の方が遙かによく展開されるのである。貨幣費用を基礎とすることによつて吾々はまた價值論の煩瑣から獨立でもあり得る。貨幣費用の背後にあるものを喪失效用と見ようと、勞働量と見ようと、それは人々の隨意であつて問題の本質には何ら變りがないのである。

さて國際貿易を直接に動かすものは費用の比較差ではなくその絶對差である。費用の絶對差が存在する時には、商品は一方的に價格のより低い國から輸出され輸入國は金を以てこれを支拂ふ。その結果、支拂國では流通貨幣量が減少して物價は下落し、受取國では流

通貨幣量が増加して物價は騰貴する。前者の國ではデフレーション的な現象が生じ、後者の國ではインフレーション的な現象が生ずる。デフレーション或ひはインフレーションは所得の分配を變化し従つて價格機構を變化せしむる。ハイエク等を中心とする貨幣的景氣論の説くところに據ると、かゝる價格機構の變化こそ恐慌の原因となるものであるから、絶對的價格差による貿易は各國民經濟に對して恐慌の危險を高めるものであると云はねばならない。この危險を避けんとする要求に應ずるものが比較的貨幣費用による國際貿易であり、その理法を明らかにすることがシユラムの論文の中心課題を形成するのである。而して理論は一應金本位制の假定の下に展開されるが、同様のことは金格本位制にも金爲替本位制にも妥當するとされてゐる。

## 二

シユラムは二財・三國の存在する次の如き設例によつて説明を行つてゐる。

	A國		B國		C國	
商品種類	x	y	x	y	x	y
商品價格	20	10	20	15	30	20
二財の關係	$0.5x=1y$		$0.75x=1y$		$0.66x=1y$	

二國の場合と異つて三國の存在する場合には比較的優位の原則の應用について二つの解釋が成立する。第一は狹義の解釋である。即ち輸入行爲と輸出行爲との間に密接な關係が存在し、販賣と購買とが必らず同一の國に向つてなされねばならぬと云ふような例である。國民市場を各々孤立化して考へ、謂はゆる個別的均衡の見地に立つた解釋で、これを假りに相互貿易の原則 *Aussenhandelsprinzip der Gegenseitigkeit* と名づけることが出来る。第二はより廣義の解釋である。輸入行爲と輸出行爲とは完全に分離され、兩者の間には密接な關係が存在しない、個々の國民市場を孤立化して考へることなく、外國市場を一つの單位と看做してこれを國內市場と對立せしむる。

先づ第一の解釋から出發しよう。A國はy商品を輸出し出来るだけ安價にx商品を購買せんとする。相互

貿易原理の適用に際してはA國はB國と取引するのが有利である。何故ならばB國は絶對的にはyに優位を持つが、相對的にはxに優位を持つからである。ところが此處でC國もまた貿易に参加する可能性を持つてゐる。いまA國とB國との需要供給關係が、 $0.75x \geq 1y > 0.66x$ なる交換比率を形成するが如く與へられてゐる時には、C國はy商品を輸出しその國からxを買ふのが有利である。かくてC國はA國の競争相手となつて現はれ、兩國の競争はy價格の下落に導き、交換比率は下の限界  $1y \parallel 0.66x$  に近づくであらう。この限界を越えて  $0.66x > 1y > 0.50x$  となれば、C國は終にxを輸出しyを輸入するに至る。しかし乍ら恐らく價格は此處まで下落することは無からうとシユラムは云つてゐる。要するに三國間の最後の均衡にとつては、各々の國の大きさや需給状態とが決定的な役割を果す。而してこの様な原則に従つて行はれる相互貿易に特徴的なことは、國際貿易が貨幣の側からの攪亂をまぬがれ得ると云ふことである。何故ならば各國は必要な輸入

を調達するに充分なだけ輸出するに止まるからである。

第二の解釋—シユラムはこれを *Prinzip der Ungehandenheit* と名づけてゐる—to 従ふと貿易關係は次の様にならう。A 國はいまや相手國を一國に限る必要がないから、取引を最有利 *Optimum* に行なうことが出来る。商品に絶對的に高價な場所に賣り絶對的に安價な場所を買ふために、 $y$  を C 國に輸出し  $x$  を B 國から輸入する。必然の結果として C 國で得た收益を B 國に輸出しなければならなくなるが、そのため若干の貨幣的攪亂が生ずる。即ち C 國では流通貨幣量が減少してデフレーション的現象が生れ、B 國では流通貨幣量が増加してインフレーション的傾向が顯著となる。この貨幣的攪亂は貿易關係を變化せしめずにはおかぬ。いま簡單化のために金移動は物價水準のみを變化し、價格機構を變化することがないと假定しよう。更らに各國に於ける需要供給の條件は、 $1/x \wedge 1/x \wedge 1.33y$  なる交換比率を成立せしめてゐると假定しよう。C 國での物價

下落 B 國での物價騰貴によつて、交換比率は A 國にとつて不利に變化せずにはおかぬ。 $y$  で表現される  $x$  の價格は次第に高價となる。而して終に  $1/x \parallel 1.33y$  となれば、A 國が  $y$  を C 國に販賣し、 $x$  を B 國から購買せんとする刺激は消滅する。更らに事態がそれ以上に進めば、 $y$  を直ちに B 國に輸出し同じく B 國から  $x$  を輸入する方が、即ち相互貿易の原則に従ふ方が A 國にとつて有利となる。ところでこれまでは A 國のみが外國貿易のイニシアテューフを持つと假定して來たがかゝる假定は現實的でない。進んで B 國及び C 國をも考慮のうちにとり入れよう。先づ B 國に關心を向ける。B 國は  $x$  を C 國に輸出しその收益を A 國に輸送して其處で  $y$  を購買するのが最も有利である。この操作によつて  $1x$  に對して  $2y$  以上が獲得され最もいゝ場合には  $3y$  が獲得される。この場合交換關係は  $3y \vee 1x \vee 2y$  である。B 國がかゝる方法で外國貿易を営むとそのことのために C 國からの金流出は更らに一層促進される。金移動によつて極限の價格關係である  $1x \parallel 2y$  が急速に招

來され、B國はこの點で從來の貿易關係を斷念せねばならない。それ以後はB國はA國で販賣し購買し、相互貿易の原則による取引を行ふべく餘儀なくされる。

A國及びB國は相互貿易をなすに至る以前に一定の特別利潤を獲得してゐるが、他國に比して高き物價水準を持つC國では特別利潤の可能性が與へられてゐない。C國は従つて相互貿易の原則による取引を行なうより以外に方法はない。通常の狀態ならA國にxを輸出しA國からyを輸入するであらう。もしA國とB國との貿易關係の結果xとyとの比率が $x:y > A:B$ となつてゐる時には、C國はyに特殊化してこれをB國に輸出する。

### 三

以上の考察から次のような結論が導き出される。短期的には物價水準の低い國は他國の犠牲に於て貿易から特別利潤を獲得することが出来る。しかし乍らそのことによつて生産力の一般的増進は招來されない。生産力の一般的増進が招來されるのは貿易が、比較生産

費説の狹義の解釋即ち嚴密な意味の相互貿易の原則によつて行はれる場合に限る。かゝる原則によつて行はれる貿易は更らに、貿易から經濟的不安を除去すると云ふいふ一つの利益を持つてゐる。吾々はこれまで國際的金移動は單に各國の物價水準を變化するのみであると假定してゐた。が事實は單にそれのみに止まらず價格機構をもまた變化せしめずにはおかぬ。さうだとすればそのことによつて貿易の見透しは一層困難となるであらう。一商品の比較的優位は大となり或ひは小となり、甚しい時には比較的優位と劣位がその地位を轉倒する場合すら生ずる。比較生産費説の狹義の解釋による相互貿易は、一方的な貨幣移動を無くするが故に、貿易から生ずるかくの如き經濟的不安を一掃するものであると云はねばならぬ。尤もその際いづれかの國は外國の犠牲に於て獲得しつゝあつた特別利潤を失はねばならぬであらう。しかしそう云つた損失は相互貿易の原則によつて與へられる貿易の安定性と明朗性に比すればとるに足らぬものである。

相互貿易の利益は右の如く明らかであるとしても、その實行に當つては若干の困難な問題が生ずる。云ふまでもなく今日貿易に従事するものは獨立した個々の商人であつて、その故に輸出行爲と輸入行爲との間には直接な關聯は存しない。従つて原理の實現に當つては兩者を國別に均衡せしむべき強力な國家統制こそ必要となるであらう。また統制の指針として價格の靜的並びに動的な姿を精密に示す詳細な經濟統計の作成が望ましいこととなる。

#### 四

シユラムはその論文の最初の部分にタウシツグの批判を附してゐるが、彼の積極的な主張は大體右のうちに盡されてゐる。それを簡單に要約しながら問題となるような二三の點を指摘しておこう。

古典派比較生産費説の主要缺陷はその基礎に勞働價值説を置いた點に存する。勞働價值或ひは實質費用による計算技術の行使は、妨げられざる國際通商の利益を明確に指示しはするが、價格關係の世界から捨象さ

れてゐる點に於て現實的でない。シユラムは近代貿易理論の多くと共に先づかゝる認識より出發してゐる。

而して比較さるべき費用を貨幣で表現することにより彼は一つの理論的歸結と一つの實踐的歸結を導き出してゐるのである。理論的歸結は貿易はそれ自身のうちに恐慌の原因を内包してゐると云ふことである。現實の貿易が個々の商人のイニシアティブにより貨幣價格を中心として行はれてゐることは何人もこれを認めなければならぬ。従つて一方の國の生産條件が絶對的に優れてゐると云ふ理論の前提から出發するならば商品は少くとも貿易の當初に於ては一方的に輸出され一方的に輸入されるはずである。貨幣もまた商品の流れとは反對の方向に一方的に移動する。この一方的な價值移轉が、一方の國にインフレーション的現象を他方の國にデフレーション的現象を生じ、恐慌の原因を形成すると云ふのである。シユラムの敘述が極めて簡單であるため詳細な批判はなし得ないが少くとも次のような點が問題とならう。(1)比較生産費説の前提から



直ちに恐慌を導き出すことは論理を餘りにも飛躍し過ぎてはゐないだらうか。生産條件の絶對的差異が存在すると云ふ前提は成程商品の一方的移動を生み從つて貨幣の一方的移動を生むであらう。しかし乍らもしそれによつて恐慌が起るとすれば、その恐慌は一時的なものであつて間もなく回復される筈である。貿易は伴なう國際恐慌はさう云つたものではなくて更らに根本的な原因によつて説明されねばならぬ様に思はれる。例へば長期資本の自發的或ひは強制的（賠償金移動の如きものから説明さるべきであらう。（2）更らに一步進んで考へると、資本の移動も單にそのみでは國際恐慌現象を説明するのに充分でない。數量説的に一方の國でデフレーションが他方の國でインフレーションが生れると云ふのみでは古典派を一步も出たことにはならないだらう。吾々は資本の國際的移動が各々の國民經濟の構造に如何なる變化を與へるかを明らかにして初めて具體的な把握をなし得るのである。

シユラムの導き出した實踐的歸結がその理論的歸結

と密接な聯關を保つことは云ふまでもない。貿易から生まれる恐慌を避けんと欲するならば、各國は一方的な價值の移轉を避けねばならぬ。而して一方的價值移轉は貿易が絶對價格差によつて行はれることより生ずるのであるから絶對價格差による取引が避けられなければならぬ。かう説いて來た後シユラムは比較價格差による取引を推賞してゐる。この原則に従ふと各國は相手國との比較に於て生産條件の相對的に優れた商品を輸出し、その相手國自身から生産條件の相對的に劣つた商品を輸入することになる。結果は古典派の説と同様であるが、自由貿易を主張した古典派とは異リシユラムによればかゝる状態は國家統制下に於てのみ損失なしで實現される。自由放任下に於ては相互的な取引が行はれるに至る以前に、一方的價值移轉が行はれねばならぬから、取引國の何れかの損失はまぬがれ得ないのである。然らば云ふところの國家統制は如何にして實現されるか。問題はすべてこの點にかゝつて來るようであるが、シユラムはそれに對して何らの説明

も與へてゐない。しかし乍らシュラムの理論を圍繞するドイツの現實と相關聯せしめて考へるとき彼の實際に意圖するところを推測するのはさして困難なことではない。賠償金問題に悩みぬいたドイツが強行した諸々の貿易統制、例へばバーター・システムと云つた様なものがシュラムの頭を去來する統制の形態であるのではなからうか。果してさうだとすればそれは恐慌の結果でこそあれ恐慌克服の手段などとは凡そ縁遠いものと云はねばならぬ。